



山崎正和著作集



不機嫌の時代

中央公論社

山崎正和著作集 8

定価二八〇〇円

昭和五十六年十二月十日印刷
昭和五十六年十二月二十日発行

著者 山崎正和

発行者 高梨 茂

印刷者 青木 勇

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七

振替東京二―三三四

©一九八一 検印廃止

I

不機嫌の時代

第一部

第一章 不機嫌の自覚——志賀直哉

第二章 その時代——荷風と漱石

第三章 気分の構造——鷗外

第二部

第一章 「私」と「公」の乖離

第二章 感情の自然主義

第三部

第一章 『それから』の時間

第二章 『明暗』の行動

第四部

第一章 傍観と自虐

第二章 不機嫌と実存の不安

あとがき
206

II

反俗の蹉跎の後に

歴史の衰退と小説の氾濫

一 歴史から解放された顔 223

二 「歴史主義」の時代から「地理的」な時代へ 228

三 失はれた歴史とはなにか 234

四 小説の氾濫 240

五 歴史回復の可能性 245

偽せの終末

文学と自己

266 250

223 211

187 154

不機嫌の体験

276

III

批評家の「私」——江藤淳

283

眩暈への凝視——石原慎太郎

300

閉ぢられた世界の探求者——奈良原一高

309

君子が怪力乱神を語るとき——司馬遼太郎

317

現実への不信と帰属——井上靖

328

徴兵忌避者が忌避したもの——丸谷才一

342

IV

みづからの贖罪——ノーマン・メイラー『アメリカの夢』

359

静止的なドラマ——野上彌生子『秀吉と利休』

364

反語と抒情——郭沫若『則天武后・筑』

367

思想は思想、人は人——花田清輝『ものみな歌でおわる』
三島由紀夫『喜びの琴』 369

能楽を思はせる儀式性——三島由紀夫『英霊の声』 372

「現代藝術」か、現代の藝術か——ラゴン『新しい藝術の誕生』
375

「和魂洋才」の克服を求めて——平川祐弘『和魂洋才の系譜』
378

小島信夫氏の恐ろしさ——『私の作家評伝』を読んで
382

山崎正和著作集 8 不機嫌の時代

I

不機嫌の時代

第一部

第一章 不機嫌の自覚——志賀直哉

第二章 その時代——荷風と漱石

第三章 気分の構造——鷗外

第二部

第一章 「私」と「公」の乖離

第二章 感情の自然主義

第三部

第一章 『それから』の時間

第二章 『明暗』の行動

第四部

第一章 傍観と自虐

第二章 不機嫌と実存の不安

あとがき

第一部

第一章 不機嫌の自覚——志賀直哉——

ひとつの名状しがたい未知の気分が、そのころ、やうやく生まれたばかりの日本の中産知識階級の家を侵し始めてゐた。

それは、捉へどころのない漠然とした気配ではあつたが、しかし、人びとはそれがこれまでの経験のなかにない、ひとつのえたいの知れない鬱屈であることには気づいてゐた。明治四十年代の初頭、すなはち、日露戦争の戦後がしだいに「戦後」として意識されるやうになつたころ、人びとはにはかにまざまざと、それが自分の日常を浸してゐることを自覚し始めたやうであつた。

その異様な気分は、まづ、たとへば次のやうなかたちで、まだ二十代の青年の心にも影を落してゐた。

湿気の烈しい、うつたうしい氣候から来る不機嫌には私は中々打ち克てなかつた。そして其不機嫌は多くの場合他人に対する不快と一緒になつて私を苦しめるのが常であつた。私は其頃祖母に対して何となく不快でならなかつた。私に対して或警戒でもしてゐるやうなものも私の気分を苛々させた。私は其時の気分でも二日も三日も此方こゝろからは一切口をきかない事などもあつた。祖父は前年の正月に胃癌で亡くなつた。そして今は私と云ふものに唯一の望を置いてゐる七十歳を越した祖母に対してする科しよとしては少

し残忍な感じも時々はした。然しこんな残忍もそれを安心して働ける人間は私にとつて祖母以外一人もない。こんな事が自分には云ひわけになつてゐた。(志賀直哉『大津順吉』)

「何となく不快」な気分として感じられるこの鬱屈は、第一に、それを惹き起した原因を明確にさし示せないところが特色であつた。それは一面で、「うつたうしい気候」そのものがもたらす不快であるやうにも見え、同時に、「祖母」といふ特定の他人が惹き起した不快であるやうにも感じられる。そもそも不快なのは外界の雰囲気であるのか、それとも主人公の内面の状態であるのか、この気分はそれについての明瞭な区別もなく彼の心身を包んでゐるのである。そして、原因が明らかでない以上、主人公はそれを投げつけて発散させるべき正当な対象についても確信が持てない。一応は「祖母」を選んで彼女に漠然たる不快をぶつけながら、彼はそのことに微妙なうしろめたさを覚えてゐる。とつてつけたやうに、祖母が彼に一種の「警戒」の表情を見せるといふのも、主人公がわれながら理不尽な自分の態度に加へたいひわけにすぎないことは明白であらう。

原因も対象も明確でない内面状態といふものは、当然のことながら、それを抱く本人にたいして不安な異物感をあたへる。通常の怒りや憎しみなら、人間はその昂まりに一体感を覚え、その感情が自分のものだといふゆるぎのない確信を抱くことができる。いはば怒りや憎しみは本人にとつて内から湧き起る生の要求であつて、人間は主体的な態度でそれを表現したり、行動の起動力にしたりすることができる。だが、ここで主人公が漠然と感じてゐる異様な不快は、彼自身の内面状態でありながら、そのやうな主体的な一体感を味ははせてはくれない。明らかに、彼はこの不快を自分のものだと感じきれないでゐるのであつて、あたかも外から降りかかった災難のやうに、それによつて自分が「苦しめ」られてゐる、と感じてゐるのである。

さらに、この気分は通常の苦痛や不快感とは違って、たとひ筋違ひでもそれなりに明快な、主張すべき訴へといふものを含んでゐない。主人公はその不快を激しい叫びや、動作に表はすことはできないのであって、せいぜい、「二日も三日も此方からは一切口をきかない事」のほかに、それを表現するすべはないのである。しかもこの場合、注目すべきことは、ここにさりげなく「此方からは」といふ一句がそへられてゐることであらう。主人公は祖母にたいして寡黙を責め道具に使ひながら、それにもかかはらず、祖母との会話を完全に拒否したわけですらなかつた。事実、彼は祖母の間ひかけには面倒臭げに答へてをり、自分の方から会話を打ち切つたといふ印象を注意深く避けてゐるやうにさへ見える。いひかへれば、彼の不快は他人を完全に拒絶するほどの主張をも含んでゐないのであり、その表現は正・負いづれの方向にも極度に消極的なものだ、といふほかはない。自閉的でありながら、しかも純粹な隔絶と孤独を選び得ないのが、この気分のもうひとつの特色であるらしく、主人公はつねに、この「残忍な」ふるまひを「安心して働ける」相手が必要としてゐるのである。

この『大津順吉』が書かれたのは明治四十五年の秋であり、この年、作者の志賀直哉は二十九歳になつてゐた。しかし、いくつかの資料から、作品の材料となつたのは明治四十年の事件であり、作者、二十四歳のときの体験であることはほぼ確実に推定することができる。五年間の距離をおいた直哉はかつての未知の鬱屈を冷静に観察し、きはめて正確にそれを「不機嫌」と命名した。そして、引用の一文に続く次の会話の多い描写は、この内面状態の形象化としておそらく古典的傑作といふべき鮮やかさを示してゐる。

或午後、私は二階の部屋で新しく着いた外国の雑誌を見てゐると祖母が登つて来た。

「角筈は何日です」如何にも機嫌を取るやうな調子で云ふ。私は一寸間を描いてから、

「あしたです」と答へた。